

令和 元年 6月 19日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03204

研究課題名(和文)無敬語地帯の地域特性と敬語行動 - 日本語敬語研究の再起動をめざして -

研究課題名(英文)Regional Characteristics and Honorific Behavior of the Non-honorific Areas-Aiming at Restarting Study of Japanese Honorific Language

研究代表者

中井 精一 (NAKAI, SEIICHI)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：90303198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：和歌山県田辺市を中心にした紀伊半島西部沿岸域の無敬語地帯を対象に待遇表現体系に関する経年調査を実施し、1990年代に実施した調査との比較によって以後の変化について把握した。また敬語行動に関する社会言語学的調査を実施し、当該地域に共通に認められる社会規範や行動規範が、対人配慮行動に与える影響にアプローチすることで、無敬語地帯における敬語行動の特徴について把握した。あわせて近畿地方を中心とした各地における日本語敬語運用に関する資料の収集・分析、および言語変化や言語行動研究と地域特性に関する理論・方法の開拓についても成果を挙げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、「無敬語」という中央日本社会とは異なる言語システムをどのように維持・成立させたのかについて解明し、敬語行動と「地域特性」に関するモデルを構築するとともに、敬語行動に焦点をあてることで、高位の視点から日本人の言語行動の特徴に迫ることが可能になる。

また、紀伊半島西部沿岸域は「無敬語」ゆえ、これまで敬語体系や敬語行動の研究の対象とされてこなかった。しかしながら、近い将来東海・東南海・南海地震による巨大津波によって地域社会の壊滅が見られるエリアであり、当該地域における敬語行動ならびに待遇表現体系の変遷を記録・把握することは、日本語敬語の将来を考えるうえからも学術的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：The researcher conducted a one-year study on the attitudinal expression system in western coastal areas of Kii Peninsula, specifically in Tanabe, Wakayama-Ken, where honorific language is not applied. The research findings are compared with the surveys in 1990s to grasp the changes. In addition, the sociolinguistic nature of honorific behavior has been investigated to explore the effects of social norms and conventions on people's consideration behavior in this region, and to further explore the characteristics of honorific behavior in this region.

At the same time, the researcher collected and analysed relevant data about the application of Japanese honorifics in different parts of Japan centered around the Kinki region. The findings also contributed to the development of research methods and theories on language change, language behavior and regional characteristics.

研究分野：社会言語学

キーワード：言語行動論 言語外要因 中心性 辺境性 沿岸域

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近畿地方中央部の待遇表現形式として用いられる「読マハル・読ミハル」のような動詞+助動詞の形式は、東北から静岡にかけての太平洋側ならびに紀伊半島南部から四国にかけての地域にはない。これらの地域では、終助詞使用と命令・依頼の場合以外に敬語の枠がゼロの単純な形式しかなく、無敬語地帯と称されている(加藤 1973)。

東北地方や東日本の太平洋沿岸地域などの無敬語地帯は、近畿中央部から遠く、中央日本語の影響を受けにくかった地域とも言えるが、近畿地方に近い紀伊半島や東海・四国地方にも無敬語地帯があることは、近畿地方から遠いゆえに中央語の敬語が伝播せず、無敬語だったのでなく、その基層にそれを受容しえない言語外環境、すなわち「地域特性」の存在を想定しない限り合理的な理解が得られない(中井 2012)。

近年、社会言語学分野では、ことばの地域差は、その地域の自然環境や社会的・経済的条件、さらには歴史的要因等の複合的な構造、つまり「地域特性」によって顕在化する現象であり、日本国内をひとつの均質化した世界としてとらえるのではなく、日本国内を多元的類型的な世界観を基調とした「異質論」の立場から研究を進める考え方が主流となっている。

近畿地方中央部に近い紀伊半島南部や四国の太平洋沿岸は、なぜ近畿中央部の待遇表現形式を受容せず、無敬語地帯であり続けてきたのか。加えて当該地域は、近い将来南海トラフを震源域とする東海・東南海・南海地震による巨大津波によって地域社会の壊滅が危惧され、緊急調査の必要性が強く意識されている。

このような前提にたつて本研究は、紀伊半島南部から四国の太平洋沿岸地域を対象に、文化人類学等の隣接分野との協業によって、社会言語学的観点から待遇表現体系および敬語行動に関する調査を実施し、無敬語地帯の敬語行動を「地域特性」との関係から明らかにしようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、東海・東南海・南海地震による巨大津波によって地域社会の壊滅が危惧される紀伊半島南部から四国太平洋沿岸の無敬語地帯を対象に、社会言語学的観点から待遇表現体系および敬語行動に関する緊急調査を実施し、「無敬語」に焦点をあてて、日本語敬語の特質ならびにその形成を「地域特性」との関係から明らかにすることで、これまでの敬語研究に新たな視点を提示することを目的としている。

3. 研究の方法

社会言語学的観点から、無敬語地帯である紀伊半島南部の和歌山県田辺市を中心に、和歌山県和歌山市や大阪府泉南市といった大阪湾沿岸都市にて、待遇表現体系ならびに敬語行動に関する経年調査と当該社会の地域特性把握のための企画調査を行い、無敬語地帯における敬語行動の分析を通じて、日本語敬語の特質についてアプローチする。

調査にあたっては、1990年代に実施した a 和歌山県田辺市調査(中井精一、谷口弘直、城野博文ほか(1990)「田辺市における方言分布の解釈」『田辺文化財』第33号)、b 和歌山市から大阪市におよぶ大阪湾沿岸調査(岸江信介・中井精一(1999)『大阪～和歌山間方言グロットグラム調査』撰河泉地域史研究会調査報告)を踏まえた第2次調査(以下「経年調査」と称する)ならびに「地域特性」に焦点をあてた企画調査を行った。

経年調査では、1990年代に実施した調査との第2次調査時点における敬語行動、待遇表現体系の解明(第1次調査との比較による敬語行動、待遇表現体系の解明)

明らかにする点

敬語行動の実態(敬語・敬意表現に関する言語行動およびその意識の詳細調査)

待遇表現体系の実態(イラッシャル、レル・ラレルといった共通語形式の使用、ならびにハル・ヤハルといった近畿地方中央部形式の受容に注目し、その詳細についての調査)

設定場面における敬語(相当)形式の使用実態(代替表現使用に関する詳細調査)

企画調査では、敬語行動に関する調査と言語外的要因である「地域特性」を把握。

当該地域の「地域特性」の把握(沿岸社会に共通する慣習や民俗事象と社会構造の特徴についての詳細調査)

沿岸社会における社会規範と対人配慮行動の実態(生業によって形成された社会規範の把握、ならびに経済基盤を背景にしたコミュニケーション行動の実態とその能力についての解明)

敬語行動ならびに対人配慮行動に関する当該地域の説明体系の解明(敬語行動の希薄性を合理的に説明するために人々が用いるさまざまな地域性や歴史上の事象、生業の特色をもとにした説明およびその方法についての把握)

これら2つの調査を実施することで、紀伊半島南部および四国の太平洋沿岸地域に共通に認められる民俗事象や沿岸社会の共通性および辺境性といった地域特性が、「社会規範」や「対人配慮行動」に与える影響を明確にし、無敬語地帯における敬語行動の分析を通じて、これまでの日本語敬語研究を再検討するとともに、「敬語」の本質に迫りたいと考える。

4. 研究成果

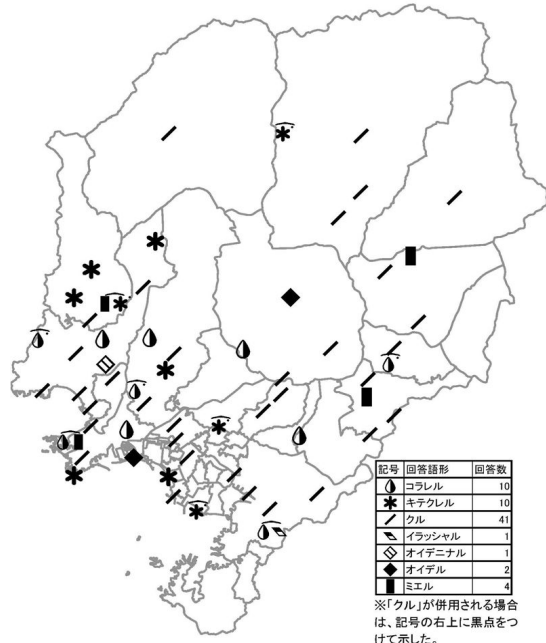
経年調査

経年調査では、和歌山県田辺市内における言語地理学的調査および田辺市～大阪市における

方言グロットグラム調査を実施することで、第2次調査時点における敬語行動、待遇表現体系の解明（第1次調査との比較による敬語行動、待遇表現体系の解明）に努めた。

田辺市域の調査では、1990年代の調査では、ほとんど使用されることのなかったレル・ラレルやミエル、オイデル、キテクレルなどの回答を得た。レル・ラレルは、話し相手が近所の知り合いで、校長といった地域社会外の目上の人物を待遇する場合に顕著に出現した（図1）。ただ、話し相手を親しい友人に変更するとレル・ラレルの使用はほとんどなかった（図2）。

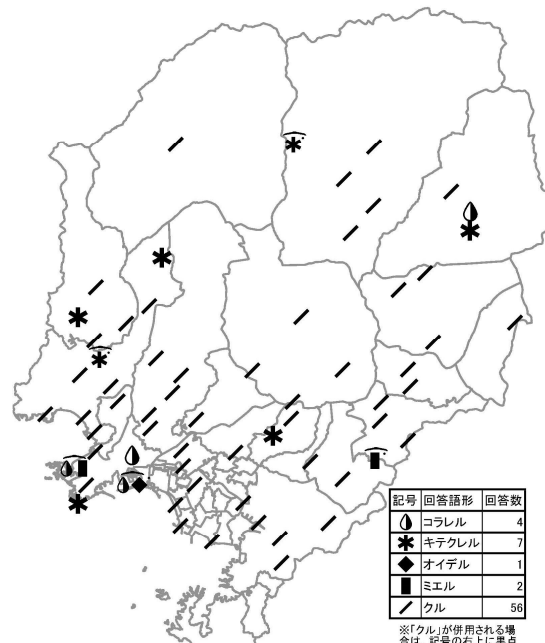
田辺市言語地図2018 C-5 <先生が来る:近所の知り合いの人に>
質問文:近所の知り合いの人にむかって、やや丁寧に「もうすぐ先生が来る」と言う場合、「来る」の部分をどのように言いますか。



(2019.3 富山大学中井研究室)

図1 田辺市における敬語使用（中井 2019）

田辺市言語地図2018 C-7 先生が来る(親しい友達に)<
質問文:親しい友達にむかって、「もうすぐ先生が来る」と言う場合、「先生が来る」の部分をどのように言いますか。



(2019.3 富山大学中井研究室)

図2 田辺市における敬語使用（中井 2019）

大阪～紀伊田辺グロットグラム2018 C-5 <先生が来る:近所の知り合いの人に>
質問文:近所の知り合いの人にむかって、やや丁寧に「もうすぐ先生が来る」と言う場合、「来る」の部分をどのように言いますか。

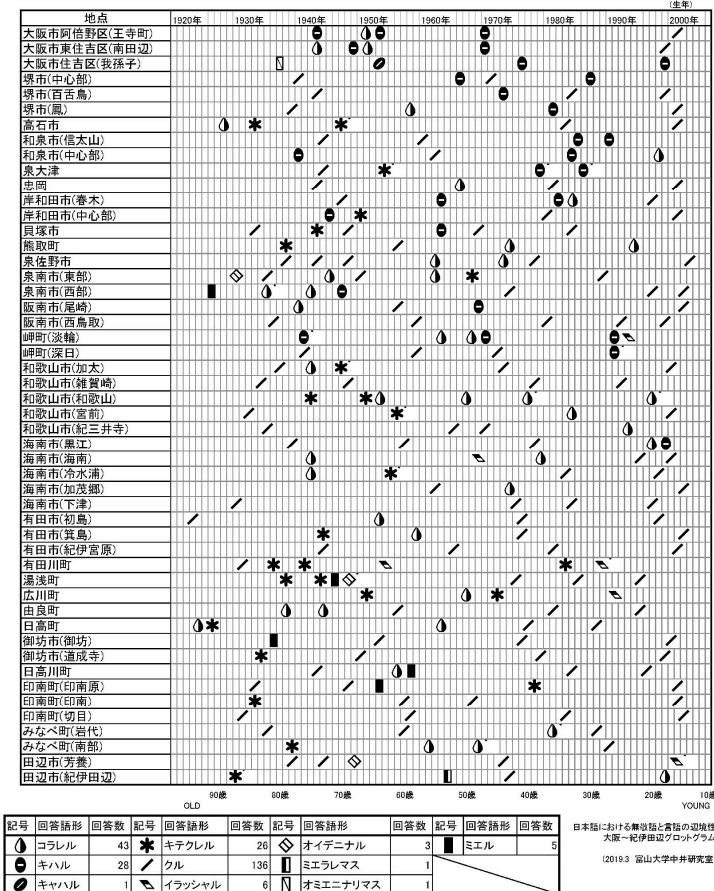


図3 大阪～田辺市間における敬語使用（中井 2019）

次に田辺市～大阪市間における経年変化を見れば、やはり話し相手が近所の知り合いで、校長等を待遇する場合に、1990年代の調査ではほとんど使用されることのなかったレル・ラレルや関西中央部で使用されるハル・ヤハルの回答が岸和田以南の地点で数多く確認された。また高石市以南の地域で「キテクレル」が多数回答された（図3）。

図4は、近年刊行された『新日本言語地図』のデータをもとに、近畿地方の敬語形式の使用を示したものである。「キテクレル」は、敬語運用の希薄な奈良県南部の吉野地方や北部の山間部、また三重県南部の熊野地方でも回答されている。クレルは本来敬意を含まないとされるが、授受行為は行為の与え手と受け手が存在し、与え手の行為によって受け手が利益を得る行為であるため、両者の間に立場的な上下関係を生じやすい。つまり、授受動詞は「授受」を表すとともに潜在的な待遇の意味がある。

クレルを使用する話者によ

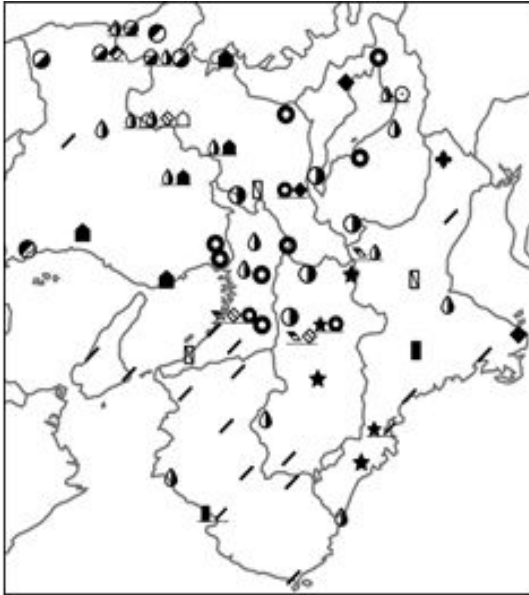


図4 近畿地方における敬語使用(中井 2017)

面した場所にあった。また集落内は、狭い路地が入り組んでいて、周辺の農家に比べると各世帯の敷地は非常に狭く、立地上の制約から農民よりも日常生活における相互協力とコミュニケーションの要請が高いことが理解できた。

漁協ならびに漁師への聞き取りから、よりよい漁場を巡って漁師は競争をくり返すため、競争意識は農民に比べると強い。したがって漁に関するさまざまな規制を設けることで、競争の激化や資源の枯渇を避けようとしてきた。そして風水害や海難に備え、農村に比べ相互の協調や結束が一層求められる社会であった。また漁民の多くは、農地をほとんど持つことがなかったため生活物資を交易に依存してきた。そして高いコミュニケーション能力が必要とされる交易活動は、ほとんどが漁民の主婦によって行われてきたこともわかった。

企画調査で得られた定性データから、当該地域の漁村では、相互の協調と結束が強く求められるゆえ、上下・親疎を表出する敬語が発達しなかったのではないかと推察された。また長く沿岸地方に成立していた農民と漁民の分業と棲み分けの関係が、無敬語の維持につながったのではないかと推察された(中井 2019)。

敬語形式の受容、特に無敬語の状態からレル・ラレルといった敬語形式の受容すなわち無敬語から有敬語への変化は、単なる言語形式の受容や交代ではなく、地域社会における言語システムの変容といった観点で把握しないとその実態把握につながらない。つまり長く無敬語という言語システムをとってきた社会では、無敬語という言語システムを保持することで安定した地域共同体が維持されてきたのであって、そこに外部から上下や親疎、ウチやソトといった関係性にもとづいた言語運用システムが持ち込まれ、それが浸透していくと、それまでの共同体内の関係性が変わり、また同時にそれまでの共同体の形態も変わらざるを得なくなる。したがって共同体が安定して維持されている無敬語地帯では、敬語や敬語運用システムは「外部」であり、容易に受け入れることはできない。敬語の変化を、地域共同体における内部と外部の関係で見通すことで、これまで気がつかなかった事実が見えてくる。調査の結果を再分析し、言語形式の変化と社会の変化の関係について、より高次の解釈にあたりたいと考えている。

(引用文献)

加藤正信(1973)『全国方言の敬語概観』『敬語講座6(現代の敬語)』明治書院 pp25-83
 中井精一(2012)『近畿中央部型待遇表現形式の受容と地域構造』『都市言語の形成と地域特性』和泉書院 pp175-214
 中井精一(2017)『142 先生が来る 近所の知り合いの人に』『新日本言語地図』朝倉書店 285-286
 中井精一(2019)『和歌山県沿岸域の言語動態』(地域活性化シンポジウム:日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して))配布資料

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 13 件)

中井精一, 河川流域の地域特性と方言, The Landscapes of World Dialectology (韓国慶北大学校李相授教授退官記念論文集), 無 535-555, 2019

大西拓一郎, 方言学とGIS, The Landscapes of World Dialectology (韓国慶北大学校李相授教授退官記念論文集), 無 513-534, 2019

中井精一, 語の受容と社会的機能, 方言の研究, 有, 4, 99-132, 2018

中井精一, 都市の言語とはなにか, 日本語学, 明治書院, 無, 37-9, 2-13, 2018

中井精一, 敬語: そのバリエーションと富山県方言, 富山大学人文学部叢書人文知のカレイド

れば「敬語と言うほどかたくなはないが、丁寧な言い方」という意識もあれば、「クレルは、その人を丁寧に扱う意味で使用する」、「敬語ではないが、敬語に近く、丁寧な言い方」と言う人や「感謝の意で、敬語に近い」とする話者もいて、クレルが、当該地域において敬語に準じる表現と意識されていることが把握された。ゼロ形式すなわち無敬語から有敬語へは、授受動詞の使用が重要な移行要素であることがわかった。

企画調査

企画調査は、和歌山県田辺市江川地区、和歌山市雑賀崎地区、和歌山市加太地区、大阪府岬町深日地区、阪南市西鳥取地区、泉南市岡田地区といった紀伊半島西部沿岸域の漁村で実施した。調査結果にもとづいて以下のような結論を得た。

調査対象の漁村は、すべて「無敬語」であった。これらの漁村は、すべて海岸に面した狭いエリアに家屋が密集していて、漁協や集会所、銭湯などの施設はいずれも海岸や港に

スコープ, 無, 1, 36-46, 2018

岸江信介, 「断り」という言語行動にみられる特徴 全国通信調査データから, コミュニケーションの方言学, ひつじ書房, 無, 95-114, 2018

中井精一, 日本語敬語の多様性とその変化, 空間と時間のなかの方言, 朝倉書店, 無, 1, 96-116, 2017

大西拓一郎, 言語変化と中心性 経年比較に基づく中心性の検証, 空間と時間の中の方言, 空間と時間の中の方言, 朝倉書店, 無, 323-341, 2017

岸江信介, 方言分布の実時間比較と見かけ時間比較, 空間と時間の中の方言, 朝倉書店, 無, 262-284, 2017

ダニエル ロング・斎藤敬太, 隣接する無敬語・敬語地域の言語景観にみられる待遇表現の違い(近畿編), 人文学報, 無, 513-7, 33-44, 2017

中井精一, 日本の言語政策と敬語運用能力, 複言語・複文化時代の日本語教育, 凡人社, 無, 63-84, 2016

中井精一, 方言分布与语言外要素, 南方語言学, 暨南大学漢語方言研究中心, 無, 11, 49-57, 2016

ダニエル ロング・斎藤敬太, 隣接する無敬語・敬語地域の言語景観にみられる待遇表現の違い(福島市編), 人文学報, 無, 512-7, 75-93, 2016

〔学会発表〕(計 15 件)

中井精一, 和歌山県沿岸域の言語動態, 地域活性化シンポジウム: 日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して), 田辺市中部公民館, (和歌山県・田辺市), 2019年1月26日

真田信治, 日本の方言研究からみた紀南地方の古態性, 地域活性化シンポジウム: 日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して), 田辺市中部公民館(和歌山県・田辺市), 2019年1月26日

大西拓一郎, 『新日本言語地図』から見える紀南方言域, 地域活性化シンポジウム: 日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して), 無, 田辺市中部公民館(和歌山県・田辺市), 2019年1月26日

岸江信介, 『近畿言語地図』に見る紀伊半島沿岸部の特徴, 地域活性化シンポジウム: 日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して), 無, 田辺市中部公民館(和歌山県・田辺市), 2019年1月26日

ダニエル ロング, 無敬語地帯と言語景観, 地域活性化シンポジウム: 日本社会の変容と伝統文化(田辺市方言に注目して), 無, 田辺市中部公民館(和歌山県・田辺市), 2019年1月26日

中井精一, 大阪市~田辺市間方言グロットグラムから見た敬語体系の変化, 地域言語研究会平成30年度研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市), 2018年8月6日

中井精一, 無敬語地帯の言語行動とその背景, 地域言語研究会平成29年度研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

大西拓一郎, 言語地図から見える日本語の辺境性, 地域言語研究会平成29年度第1回研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

ダニエル ロング, 無敬語地帯の言語景観, 地域言語研究会平成29年度第1回研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

西尾純二, 配慮言語行動についての「内省」の位置づけと地域性 大阪市の調査, 地域言語研究会平成29年度第1回研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

松丸真大, 大阪と京都の配慮言語行動-発話するかしないか-, 地域言語研究会平成29年度第1回研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

乾誠二・田中芳英, 近畿地方周縁部の交通体系と地域特性, 地域言語研究会平成29年度第1回研究発表会, 無, 大阪府立大学 I-site なんば, (大阪府・大阪市) 2017年7月30日

中井精一, 和歌山-田辺グロットグラム調査から, 地域言語研究会平成28年度第2回研究発表会, 無, 天理大学附属天理参考館, (奈良県・天理市), 2016年12月3日

中井精一・谷口萌子, 河川流域の敬語体系 - 神通川流域と庄川流域を比較して -, 第160回変異理論研究会, 無, 関西大学彦根セミナーハウス, (滋賀県・彦根市), 2016年7月30日

中井精一, 日本の言語政策と敬語運用能力, Sinposio Internacional de Lingua Japones como Lingua Global, 有, Sao Paulo Brasil, 2015年8月10日

〔図書〕(計 4 件)

中井精一, 紀伊半島西部沿岸域における言語の動態, 田辺市教育委員会, 220, 2019年3月31日
李舜炯・ダニエル ロング・中井精一, 都市空間を編む言語景観, 中文出版社(韓国), 333, 2019年1月25日

真田信治・中井精一・岸江信介・西尾純二・松丸真大・鳥谷善史・ダニエル ロング・大西拓一郎・市島佑起子, 関西弁事典, ひつじ書房 504, 2018年3月31日

中井精一, 神通川流域流域言語地図, 富山大学人文学部, 70, 2016年3月31日

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：ダニエル ロング
ローマ字氏名：Daniel Long
所属研究機関名：首都大学東京
部局名：人文科学研究科
職名：教授
研究者番号(8桁)：00247884

研究分担者氏名：大西 拓一郎
ローマ字氏名：Onishi Takuichiro
所属研究機関名：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所
部局名：言語変化研究領域
職名：教授
研究者番号(8桁)：30213797

研究分担者氏名：岸江 信介
ローマ字氏名：Kishie Shinsuke
所属研究機関名：徳島大学
部局名：大学院総合科学研究部
職名：教授
研究者番号(8桁)：90271460

(2)研究協力者

研究協力者(連携研究者)氏名：真田 信治
ローマ字氏名：Sanada Shinji

研究協力者(連携研究者)氏名：西尾 純二
ローマ字氏名：Nishio Junji

研究協力者(連携研究者)氏名：松丸 真大
ローマ字氏名：Matsumaru Michio

研究協力者(連携研究者)氏名：乾 誠二
ローマ字氏名：Inui Seiji

研究協力者(連携研究者)氏名：市島 佑起子
ローマ字氏名：Ichishima Yukiko

研究協力者(連携研究者)氏名：松森 智彦
ローマ字氏名：Matsumori Tomohiko

研究協力者氏名：中川 貴
ローマ字氏名：Nakagawa Takashi

研究協力者氏名：城野 博文
ローマ字氏名：Jono Hirofumi

研究協力者氏名：鳥谷 善史
ローマ字氏名：Toritani Yoshifumi

研究協力者氏名：加田 芳英
ローマ字氏名：Kada Yoshihide

研究協力者氏名：谷口 萌子
ローマ字氏名：Taniguchi Moeko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。